

山代の木幡「道衢」をめぐって

前田 晴人

On the “Chimata (Crossing)” of Kohata in Yamashiro Province

Haruto MAEDA

目 次

はじめに

- I 木幡「道衢」の伝承
- II 「山科郷古図」の考察
- III 物部氏と古代の市
- IV 宇治と木幡の物部氏

おわりに

キーワード 道衢（チマタ）・市・ワニ氏・物部氏

要 旨

京都盆地東辺中央部に位置する宇治郡は、平安京が造営されるまでの時期には古代山代（山背・山城）国の地政的要地としての地位を占めていた。奈良盆地に所在した王都から古北陸・東山道が宇治郡域を貫通して近江方面へ至り、また木津川・宇治川が流入した旧巨椋池の東岸には岡屋津が控え、水陸両交通上の結節点となっていた。とりわけ宇治川渡河点の宇治と、その北方に当たり幹線交通路の分岐点である木幡は、古代・中世史の伝承・文献に恵まれた土地柄であり、本論では当地におけるワニ氏と物部氏に関わる史実を掘り起こす作業を試みることにした。

はじめに

平安京造営以前の宇治・木幡地域は、摂津・河内両国への出入り口に当たる淀・山崎とともに、京都盆地における交通上・政治上の要衝の位置を占めていた。とりわけ宇治川の渡河点と、その北方に位置する木幡「道衢」は共に古北陸・東山道の結節点であり、また岡屋津は旧巨椋池の東岸に所在し、泉木津・淀津とともに淀川水系の要港となっていた。これらを含む宇治郡は、旧巨椋池の東岸一帯と山科盆地を領する形で京都盆地の南北・東西両地域を水陸両交通網

によって緊密に結びつける中核的な位置を占めたので、古代のそれぞれの時期に有力な集団が当地域で興亡隆替をくり返したが、本論ではヤマト王権の中枢部に座を占めたワニ氏（5、6世紀）と物部氏（6世紀）のそれぞれに焦点をあて、地政的な視点から大化以前に遡る当地域の古代史像を具体的に描いてみたいと思う。なお、表題に記す「山代」は令制の山背国（山城国）以前に遡る旧国名であることをお断りしておく。

I 木幡「道衡」の伝承

さて、論題に記した木幡「道衡」に関しては『古事記』応神段に次のごとき著名な伝承がみえる。

一時、天皇近淡海国に越え幸でましし時、宇遲野の上に御立ちしたまひて、葛野を望けて歌曰ひたまひしく、

千葉の 葛野を見れば 百千足 家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ

とうたひたまひき。故、木幡村に到り坐しし時、麗美しき嬢子、其の道衡に遇ひき。爾に天皇其の嬢子に問ひて曰りたまひしく、「汝は誰が子ぞ」とのりたまへば、答へて曰ししく、「丸邇之比布禮能意富美の女、名は宮主矢河枝比売」とまをしき。天皇即ち其の嬢子に詔りたまひしく、「吾明日還り幸でまさむ時、汝が家に入り坐さむ」とのりたまひき。故、矢河枝比売、委曲に其の父に語りき。是に父答へて曰ひけらく、「是は天皇に坐す那理。恐し、我が子仕へ奉れ」と云ひて、其の家を厳飾りて候ひ待てば、明日入り坐しき。故、大御饗を献りし時、其の女矢河枝比売命に、大御酒盞を取らしめて献りき。是に天皇、其の大御酒盞を取らしめ任ら御歌曰みしたまひしく、

この蟹や 何処の蟹 百傳ふ 角鹿の蟹 横去らふ 何處に到る 伊知遲鳥 美島に著き 鳩鳥の 潜き息づき しなだゆふ 佐佐那美路を すくすくと 我が行ませばや 木幡の道に 遇はしし嬢子 後姿は 小楯ろかも 齒並みは 椎菱如す 櫟井の 丸邇坂の土を 初土は 膚赤らけみ 底土は 丹黒き故 三つ栗の その中つ土を かぶつく 真火には当てず 眉画き 濃に画き垂れ 遇はしし女人 かもがと 我が見し子ら かくもがと 我が見し子に うたたけだに 対ひ居るかも い添ひ居るかも

とうたひたまひき。如此御合したまひて、生みませる御子は、宇遲能和紀郎子なり。

上の説話は応神天皇と丸邇之比布禮能意富美の娘との婚姻の顛末を記したもので、その間に生まれたのが宇遲能和紀郎子と伝承されている。一方、『日本書紀』応神2年3月条には、「和珥臣の祖日触使主の女宮主宅媛、菟道稚郎子皇子・矢田皇女・雌鳥皇女を生めり」とあって、『古事記』応神段に対応する所伝が掲載されているが、なぜか書紀は皇子女の出自系譜を記載するのみで、上に引用した説話を採録していない。

この話は、山代の「宇遲野」の北辺に属する「木幡村」に、ワニ氏の有力な族長が経営する

「家（ヤケ・ヤカ）」が所在した事実を背景にして語られた説話と考えられ、ある時応神天皇が近江国に行幸する途上で輿を「宇遲野」に留め、盆地北部一帯の葛野地方を国見・国讃めし、その後族長の嬢子と「木幡村」の「道衡」に邂逅したのを契機に、還幸の際その「家」において族長の手厚い饗応を受け、嬢子が天皇の妃となって皇子を生んだことにより、以後ワニ氏が天皇に臣属・奉仕するようになるひとつの画期的・象徴的な機縁を得た次第を述べたものである。

説話の最後に掲載してある「蟹の歌」は、ワニ氏に隷属していた若狭湾沿岸地方の漁民が族長に貢納していた角鹿（越前の敦賀）の蟹を主人公とし、この蟹が佐佐那美遲（西近江路）を経て「木幡村」の「道衡」で美麗な化粧を施した嬢子に邂逅したことを喜悅・讃嘆した祝宴の歌らしく、元来はワニ氏の部族儀礼の饗宴の場で披露される祝言であったものを、転じて天皇の御製歌として掲載したものらしく、蟹の道行きが天皇のそれと重ねられているので、誦読する者に名状しがたい違和感を与える原因となっている。おそらく角鹿の蟹はこのち天皇の食饌に献上される贅としての運命をたどるが、内容からみて宮廷ゆかりの即興歌というには程遠い在地性の濃い歌である。書紀がこうした説話や歌謡を取り上げなかったのは、この所伝には歌謡だけではなく他にも問題があることに編者が気づいていたからであろう。

書紀が嬢子の名を「宮主宅媛」と記しているのは、嬢子が天皇との間に儲けた皇子を出生・養育した施設である「宮（ミヤ）」と、ワニ氏の政治的・経済的共同組織たる「家・宅（ヤケ・ヤカ）」が族長権を有する日触使主とその娘の経営・管理下に置かれていたことを象徴的に表すもので、「宮」については『山城国風土記』逸文に、

宇治と謂ふは、輕島豐明宮御宇天皇の子、宇治若郎子、桐原日桁宮を造り、以て宮室と為し、御名に因りて宇治と号す。本の名は許乃国と曰ふ。

とあって、宇治の地に造営された「桐原日桁宮」が皇子の居館となったことを具体的に語っており、「日桁宮」の周辺地域が「許乃国（コノクニ）」と呼ばれたのは、おそらく木幡（コハタ）村の「木（コ）」に由来する地名であったと考えられ、日触使主の「家・宅」も「日桁宮」の近隣に所在し、「宮」への政治的・経済的な支援活動を行う拠点となっていたとみてよく、このように宇治・木幡地域には皇子宫にまつわる伝承が作られる環境が存在したのである。

ところで、ワニ一族の政治活動の中核施設としては当然王都の所在地である大和にも設置されていた。先に引用した蟹の歌には、唐突にも山代から遠く離れた大和の「櫟井の丸迹坂」が登場し、そこで採取された「土」が女人の眉墨に使われたと歌っている。「櫟井の丸迹坂」（天理市和爾町）と呼ばれた土地は、ワニ同族集団の「大家・大宅（オホヤケ）」たる部族会同の聖地の所在地であり、そこがワニ氏にとって王権に集中的な奉仕を行う主要拠点であったことを物語っており、延喜式神名帳にでる添上郡の和余坐赤坂比古神社・和余下神社が「丸迹坂」の坂上・坂下に鎮座しており、当地を軸として奈良盆地東北部の和爾・春日一帯の地域にワニ氏本系の有力諸氏族（春日臣・大宅臣・栗田臣・小野臣・柿本臣・櫟井臣）が揃って拠点・居館

を構えていたのはそのためである。ただし、菟道稚郎子や宮主宅媛が抽象的且つ普通名詞的な性格を帯びた人名であって実在性には疑問が残るだけではなく、説話の時代を応神朝にかけているのもそもそも造作の類で、王権との関係の成立をより古い時代に見せかけようとする始祖伝説に特有の政治的意図を看取すべきであろう。

『古事記』仁賢段には「丸邇の日爪臣の女、糠若子郎女を娶して、生みませる御子、春日の山田郎女」とあり、『日本書紀』仁賢元年2月条には天皇の妃に関し、「和珥臣日爪が女糠君娘、一の女を生めり。是を春日山田皇女とす。一本に云はく、和珥臣日触が女大糠娘、一の女を生めり。是を山田大娘皇女とす」とあって、ここに応神紀と同姓同名の「和珥（ワニ）臣日触」という人物が登場している。さらに欽明天皇の妃糠子郎女の父を「春日日爪臣」（欽明記）・「春日日爪臣」（欽明紀）とする伝承もあり、記・紀に散見するワニ氏の首長系譜に錯簡・重出が認められ、仁賢紀分注の「和珥臣日触が女大糠娘」にまつわる伝聞をベースとして応神紀の話が新たに語り出された蓋然性があり、5世紀末前後の時期に実在したらしい日触臣が、「木幡村」を本貫としたワニ同族団の当時の族長の地位にあった人物と推測されるのである。

上記の説話は国見・歌垣の風習をベースとして作り上げられた天皇の定型的求婚譚といえるが、ワニ氏が天皇に娘を差し出し服属儀礼と奉仕を行ったことを誇示する意図が明確である。ワニ氏にまつわる同様の話は『古事記』雄略段にも、「又天皇、丸邇の佐都紀臣の女、袁杼比壳を婚ひに、春日に幸行でましし時、媛女道に逢ひき。即ち幸行を見て、岡の辺に逃げ隠りき」とあり、この場合の「道」とは、初瀬朝倉宮を起点とした雄略天皇の行幸の道程からみて、山辺の道を通して春日に向う途中の「石上衢」（天理市石上町）が相応しく、天皇と媛女が「道に逢ひき」というのは歌垣の場での邂逅を推察させる。

衢の歌垣が古代のある時期に貴顕の婚姻に関わる風習の場となっていたことは、『古事記』清寧段と『日本書紀』武烈即位前紀に載せる「海石榴市衢」を舞台とした伝承が最も著名である。清寧記では菟田首大魚という女性を平群臣志毘・袁祁命（顕宗天皇）が奪い合い、書紀では物部麁鹿火大連の娘影媛を平群臣鮪と武烈太子が争奪する話で、影媛が男らとの会合の場を「妾望はくは、海柘榴市の巷に待ち奉らむ」と約束しているのは、春秋二期に開催された歌垣が王侯貴族らの婚姻に結びつく社会的儀礼の舞台となっていたことによるもので、雄略・清寧・顕宗・武烈の各天皇はいずれも5世紀後半から6世紀前半頃の王者と伝える者たちである。

「道衢（チマタ）」は一般的に道路の分岐点そのものを意味する語で、疫病や犯罪・災禍などの原因とされた悪霊・悪鬼の地域社会への侵入を阻む道饗祭（道祖神祭）・疫神祭、あるいは後世に地藏信仰などの舞台となったが、古代には二、三郡ごとの幹線道路に固有名をもつ衢が成立し、そこで行われた夕占・相撲・誄・歌垣などさまざまな呪術の風習や儀礼を契機としてひと・モノ・情報が集散し、やがて携行品の交換や取引がはじまると、「海柘榴市衢」の事例のように衢に市が成立し、見せしめの刑罰や治安・警察活動の拠点として重視されるようになってくる。村落首長層や有力農民の余剰生産物が流通に供されるようになる画期は5世紀後半前

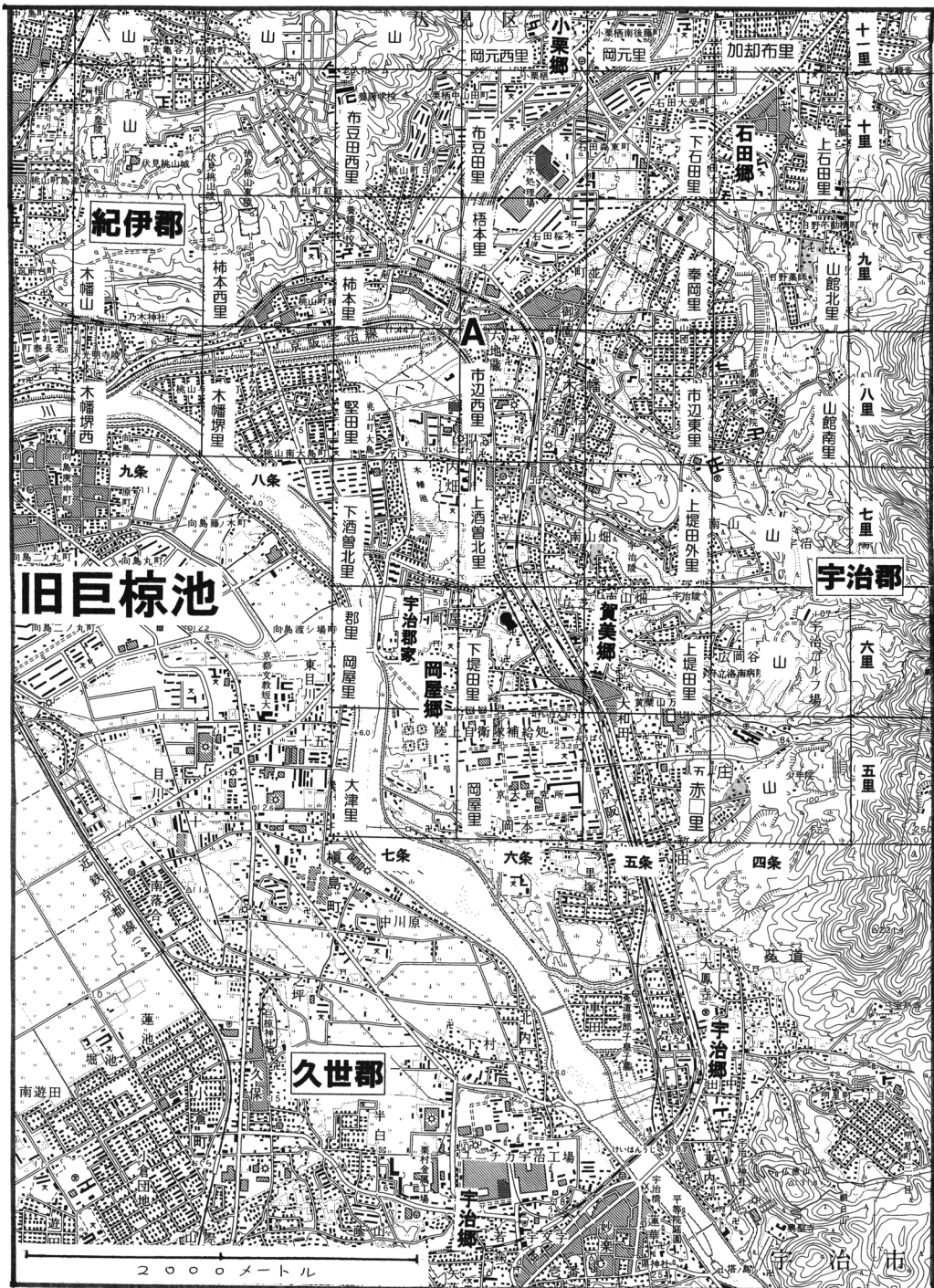
後の時期とみられ、列島各地の衢に市が簇生するのもその頃である。本論で問題とする木幡「道衢」もそうした古代の市の場とみられるが、「木幡市」はその地政的位置からみて古代京都盆地に生成した最も著名な市のひとつであったと想定することができ、ワニ氏が木幡の地に拠点のひとつを設置したのは、そこが山代と大和を結ぶ主要幹線道路の結節点であっただけではなく、「道衢」とその「市」のさまざまな社会的政治的機能を掌握するためでもあったと考えられるのである。

Ⅱ 「山科郷古図」の考察

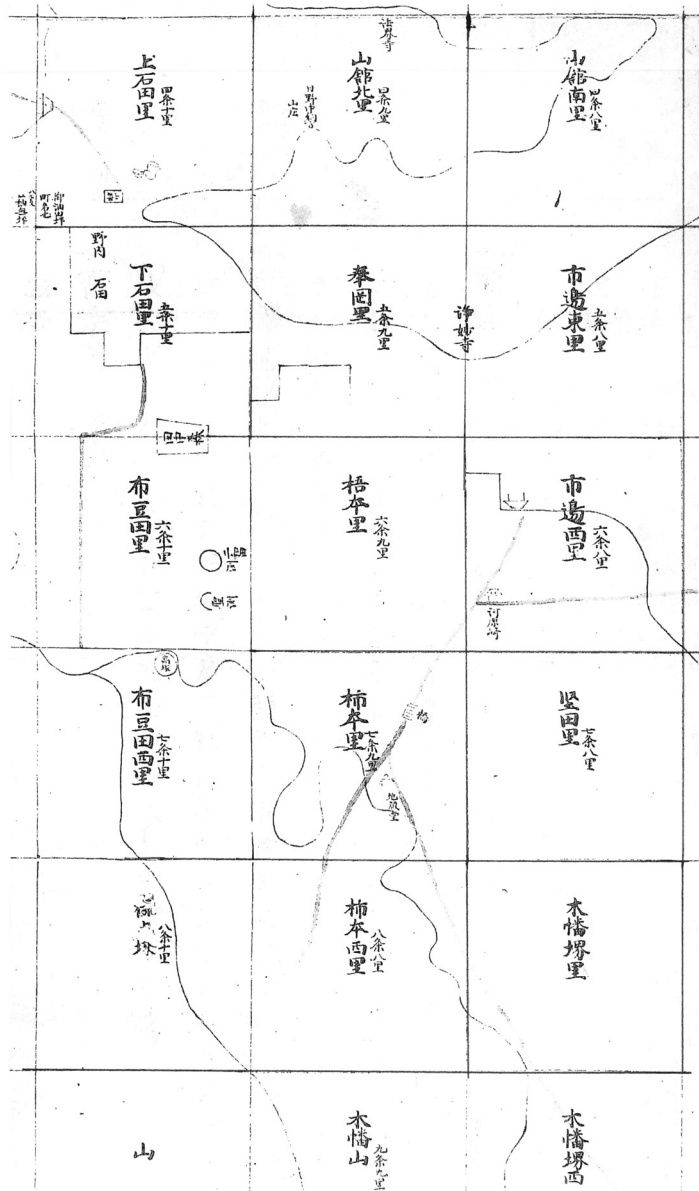
応神記にでる山代の木幡「道衢」の実像に関しては、「山科郷古図（山科条里図）」が貴重な手がかりと情報を提供してくれる。「山科郷古図」は京都市伏見区小栗栖に所在する勧修寺〔延喜4（904）年藤原定方創建〕の寺域画定と寺領保全の目的で作成された「宇治郡指図」に起源を有し、平安時代保安（1120～1124）・保元（1156～1159）年間に遡る宇治郡域の条里制を中心とする様々な情報を記述している。本論では紙幅の関係から木幡と宇治を中心とした地域を対象を絞り込み、国土地理院発行の地図上に宇治郡の条里界線と里名を重ねる形で歴史地図の復原を試み（図Ⅰ）、さらに木幡「道衢」周辺の条里部分図を読者の参考に供すべく掲載することにした（図Ⅱ）。「山科郷古図」には古代に淵源すると考えられる条里里名や古代末・中世の諸施設などが記載されており、当地域の古代・中世史を復原するための貴重な手がかりとすることができる。

さて、律令制下の宇治郡は宇治・大国・賀美・岡屋・余戸・小野・山科・小栗・石田の九郷から成り、図Ⅰは主に宇治郡南西部の宇治・岡屋・賀美・石田郷の範域に該当する。そのうち宇治郡家は七条六里の郡里記載に基づき岡屋里に所在した。ここは旧巨椋池の東岸で岡屋津（大津）の港津が控え、郡家の東を古北陸・東山道が通過する水陸交通上の要衝となっており、6世紀前半には継体天皇の皇子女または有力廷臣かと推測される重要人物の墓が造営された（五ヶ庄二子塚古墳・六条六里）。ワニ氏は歴代天皇の宮廷に相次いで女子を送り込むことで王権との結びつきを強めたが、継体朝には「和珥河内臣女萇媛」が後宮に入っており、墓の造営地が木幡地域である点を考慮すると、天皇と萇媛の間に生まれた厚皇子（阿豆王）を被葬者とする可能性があり、萇媛やその皇子の像が宮主宅媛・宇治稚郎子母子の伝承を生む素地になったのかも知れない。

ところで周知のように、古代・中世の木幡はかなり広い境域をもった地名で、西・北は伏見・桃山丘陵から東は日野・五ヶ庄に続く丘陵地帯を含め木幡（強田）山と呼ばれたらしい。『万葉集』では北国・東国・近江方面へ旅する人々が「山科の木幡の山」と歌いあげ、『三代実録』元慶6（882）年12月の狩獵禁断勅には「紀伊郡芹川野・木幡野」とあり、藤原道長が寛弘2（1005）年に建立した浄妙寺は「木幡三昧堂」「木幡寺」とも呼ばれた。いま図Ⅰを検してみる



図Ⅰ 宇治・木幡図 (国土地理院2万5千分の1地形図をもとに著者作成)



図Ⅱ 山科郷古図 (木幡部分)

出典: 『大日本史料』 第二編之七、東京大学資料編纂所、1942年

と、紀伊郡に属する木幡山（九条九里）・木幡堺西（九条八里）・木幡堺里（八条八里）があり、東方では日野に近い御蔵山団地の辺りに「浄妙寺」（図Ⅱ）の記載があるのが確認できる。先に引用した風土記逸文の「許乃国」の所伝以来中世末に至るまで、木幡はかなりの広がりをもった地域であったと考えてよい。

ところで、問題の木幡「道衢」は、宇治・紀伊両郡界を成す山科川（櫃川）の左岸に接する宇治市木幡地区の大字六地藏【図Ⅰ・A】に比定できる。【A】は宇治川渡河点・宇治橋から北上してきた古北陸・東山道が山科方面と紀伊郡深草及び伏見方面に分岐する要地となっており、平安時代には京東南郊の霊地とされた場である。地名六地藏の由来は、送葬儀礼の誄（シノビゴト）の風習から窺えるように、衢が現世と他界との接点を成す霊的空間と認識され、亡者を極楽浄土の世界に導く地藏信仰に基づくもので、当地には勅命により仁寿2（852）年に大善寺六地藏堂が創建されたと伝える。図Ⅱには「橋」のすぐ西の道路分岐点に「地藏堂」の建物らしきものが描記されているのが確認できる。

さらに注目されるのは、【A】に隣接する東西二つの里名が「市辺東里・市辺西里」とあることで、図Ⅰ・Ⅱを精査し読み比べてみると、【A】には「河原崎」という地名の注記と東南東方向に緩やかにカーブする道（約300m）が記され、道の両端には小規模な建物を二棟描き市場在家の縄張を表現しているように見える。これらの記述は『一遍聖絵』にみえる備前国福岡市や信濃国佐久郡の伴野市などの様子と対比できるもので、中世の定期市が「無縁・公界・楽」の世界を象徴する河原に設置された小屋がけの施設の集合体であった事実を彷彿とさせ、地方市が郡界や河原に所在したこととも符合し、地方市に市酈・市店がいつ頃出現するのかはまだ明確ではないが、中世の木幡市が形態は異なるとはいえ古代に淵源する市であることは確実であろう。

古代の衢には椿・槻・櫟・櫟・橘・桑・柳などそれぞれの市に特有の並木が植栽されていたらしく、物品の取引はこれらの樹木の下で行われた。木幡「道衢」の標識となった樹木は「梧本里」（六条九里）の存在から梧（アオギリ）と想定され、前節で指摘した『山城国風土記』逸文にでる宇治若郎子の「桐原日桁宮」が「道衢」の聖なる梧桐の並木と関わる施設であったことを示唆しており、市辺里の北西に接して「柿本里」（七条九里）、その西に「柿本西里」（八条九里）があることは、ワニ氏の居館である「家・宅」が木幡「道衢」の近在に設置され、先にも述べておいたように応神記の説話が何らかの歴史的背景のなかで成立した事情を裏書きしている。

条里里名の「柿本」はワニ氏同族団のひとつ柿本臣に由来する地名とみられ、木幡山を西北に越えた紀伊郡深草郷にも「柿本里」がある。おそらくこれらの地名は前節で述べた和珥日触臣に関わる「家・宅」との関連が推定され、日触臣は「春日臣」や「柿本臣」の系譜的先祖に当たる有力首長であったと考えてもよいであろう。そもそも山代の宇治・紀伊・愛宕三郡と、比叡山系の東麓に当たる近江国志賀郡はワニ氏同族諸氏族の拠点・居館が数多く濃密に分布す

る地帯であり、ワニ氏の氏名の起源は大和の「丸邇（和爾）」「丸逆坂」にあったとしても、同族集団の拠点は山代・近江の各地に広く分布しており、なかでも王都の所在地である大和への前進基地・結節点として、宇治・木幡の地がきわめて枢要な位置を占めたことを疑うことができないであろう。

Ⅲ 物部氏と古代の市

古代の市が犯罪者に刑罰を科す場であり、罪人を繋ぐ獄舎が市の近辺に置かれ、さらに警察・刑獄を専職とする集団が各地の市の周辺に居住していたことを窺わせる史料が『日本書紀』に幾つかみえる。まず雄略紀13年3月条を検討してみよう。

狭穂彦が玄孫齒田根命、竊に采女山辺小嶋子を姦せり。天皇、聞しめして、齒田根命を以て、物部目大連に収付けて、責讓はしめたまふ。齒田根命、馬八匹・大刀八口を以て、罪過を祓除ふ。既にして歌して曰はく、

山辺の 小嶋子ゆゑに 人ねらふ 馬の八匹は 惜しけくもなし目大連、聞きて奏す。
天皇、齒田根命をして、資財を露に餌香市辺の橘の本の土に置かしむ。遂に餌香の長野邑を以て、物部目大連に賜ふ。

王孫の齒田根命が重罪を犯したので、天皇は物部大連目に命じて罪人を叱責・教誨させ、罪過に見合う贖物（馬・大刀）を徴した。だが、命はそれでも懲りずに不遜な態度をとり続けたため、天皇は命の資財を餌香市（藤井寺市国府）の橘の木の根元に露出させたとする。罪過がより重くなったため没官された資財は市の自由交易に委ねられたのである。処罰の場が餌香市なのは、齒田根命の本貫が河内にあったからであろう。断罪は「罪過を祓除ふ」と記しているように、罪人の穢れを祓う儀礼と深く関係していた。

この記事からは罪人を拘禁する囚獄の施設の存在や、犯罪の軽重に関わる処罰及び贖物の段階規定、さらに物部が贖物を管理するなどのことを推定でき、令制前代にも刑獄の組織や処罰の規定がかなり整備されていたことが窺われる。天皇の勅断により物部大連が実務を担っているのは、事件が内廷の重大事案に関わるものであったからで、関係記録が物部氏の家伝から採択されたのであろう。記録の主な目的は河内の餌香市に接する長野邑（志紀郡長野郷）が物部氏の公的な活動拠点のひとつとして王権から賜った土地であることを主張するためとみることができ、物部大連配下の伴造や伴部の物部が長野邑に集住・駐在していたと考えられる。物部氏の警獄の官としての活動を鮮明にする事例は『日本書紀』敏達14年3月条にもみえる。

物部弓削守屋大連と、中臣勝海大夫と、奏して曰さく、「何故にか臣が言を用る肯へたまはざる。考天皇より、陛下に及るまでに、疫疾流く行りて、国の民絶ゆべし。豈専蘇我臣が仏法を興し行ふに由れるに非ずや」とまうす。詔して曰はく、「灼然なれば、仏法を断めよ」とのたまふ。物部弓削守屋大連、自ら寺に詣りて、胡床に踞げ坐り。其の塔を斫り倒

して、火を縦けて燐く。并て仏像と仏殿とを焼く。既にして焼く所の余の仏像を取りて、難波の堀江に棄てしむ。是の日に、雲無くして風吹き雨ふる。大連、被雨衣り。馬子宿祢と、従ひて行へる法の侶とを訶責めて、毀り辱むる心を生さしむ。乃ち佐伯造御室を遣して、馬子宿祢の供る善信等の尼を喚ぶ。是に由りて、馬子宿祢、敢へて命に違はずして、惻愴き啼泣ちつつ、尼等を喚び出して、御室に付く。有司、便に尼等の三衣を奪ひて、禁錮へて、海石榴市亭に楚撻ちき。

周知のように、仏教の受容をめぐる蘇我氏と物部氏が激しく対立し、反対派の物部氏らは疫病が流行したのは大臣蘇我馬子の崇仏のためであると論難し、仏教を嫌っていた敏達天皇も大連物部守屋・中臣勝海らの意見に動かされ、詔命に従い物部大連守屋の差配により仏殿・塔などの施設は焼き払われ、仏像を堀江に流し棄て、馬子とその仲間に恥辱を加え、尼僧らを捕縛し法服を脱がせ「海石榴市亭（厩）」で杖罪に処したという。この記述から海石榴市付近に罪人を「禁錮」するための獄舎と駅家の施設があり、刑獄の実務担当官佐伯造御室が大連守屋の命を受け厩の施設内で尼たちへの杖刑を執行したことがわかる。

令前の警察・刑獄の機構は5世紀末頃に整備され、負名氏による専職分掌制を敷いていた。奈良時代以後の律令制の時期に刑部省囚獄司・衛門府・京東西の市司などに物部が配属され、非違の検察・囚人の管理・刑罰の執行などの職務に預かったのがその遺制で、警察機構は物部（地名）連—物部が、行刑分野は（地名）造—（地名）物部が担当し、物部大連が双方の機構を統括する形態をとっていた。因みに畿外の司法権は原則的に国造が差配し、謀反・反乱のような重大事案以外は国造と各国に設置された物部に権限が集約されていた。また587年に起きた蘇我・物部戦争で物部大連守屋の一族は滅んでしまうので、畿内の司法権は蘇我大臣家に掌握されたが、その実務は前代の組織が引き継いでおり、次に引用する二つの史料が刑獄の職務活動を明示している。

大臣、境部臣を殺さむとして、兵を興して遣す。境部臣、軍の至ることを聞きて、仲子にあたる阿都を率ゐて、門に出でて胡床に坐て待つ。時に軍至りて、乃ち来目物部伊区比に令して絞らしむ。父子共に死りぬ。乃ち同處に埋めり。

（『日本書紀』舒明即位前紀）

推古天皇没後に起きた皇位継承の紛糾により、蘇我氏内部でも大臣蝦夷とその叔父境部摩理勢との対立が激化し、ついに大臣は兵を興して摩理勢一家を肅清した。摩理勢父子は抵抗することなく絞刑に処せられたが、その処罰を執行したのは来目物部伊区比である。摩理勢の家は畝傍山の麓にあったので、軽市の近くの来目邑（橿原市久米町）を居所としていた来目物部の集団が処刑の場に召されたい。同様の事例は大化年間にもみられる。

山田大臣の妻子及び隨身者、自ら経きて死する者衆し。穂積臣嚙、大臣の伴党田口臣筑紫等を捉め聚めて、枷を着け反縛れり。是の夕に、木臣麻呂・蘇我臣日向・穂積臣嚙、軍を以て寺を囲む。物部二田造塩を喚して、大臣の頭を斬らしむ。是に、二田塩、仍ち大刀

を抜きて、其の穴を刺し挙げて、叱咤び啼叫びて、始し斬りつ。蘇我山田大臣に坐りて、戮さるる者、田口臣筑紫・耳梨道德・高田醜雄・額田部湯坐連・秦吾寺等、凡て十四人。絞らるる者九人。流さるる者十五人。

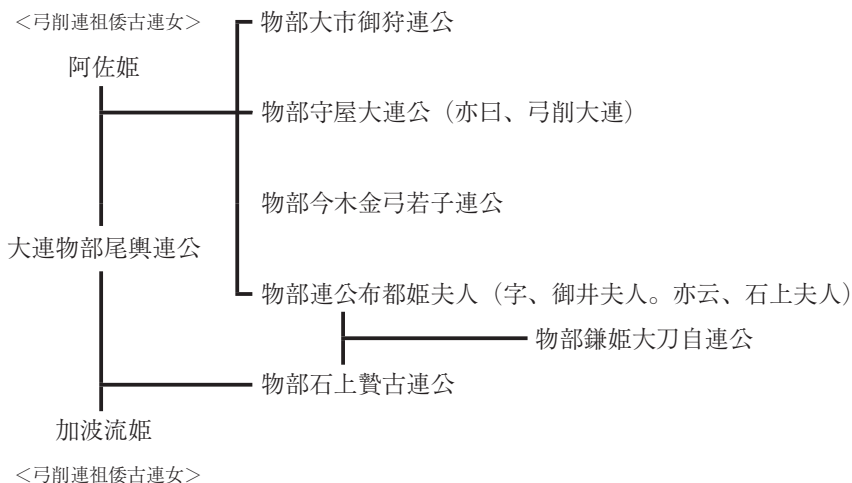
(『日本書紀』大化5年3月条)

上は孝徳天皇の大化5(649)年に起きた右大臣蘇我倉山田石川麻呂の謀反事件に関わる記事である。謀反の疑いをかけられ難波京から大和の山田寺に逃げ帰った大臣は無抵抗のまま多くの親族・随従者らとともに自尽するが、後から到着した朝廷軍は大臣の伴党らを全員逮捕し、「枷を着け反縛れり」とあるように首枷・脚枷を着けられ後ろ手に縛り上げられている。さらに、寺を包囲した將軍らは物部二田造塩を呼び、「大臣の頭を斬らしむ」とあり、塩は命令に従い大刀を用いて大臣の遺体に斬刑を施したと記し、連坐の伴党らは斬刑14人・絞刑9人・配流15人に及んだとする。

事件の深刻さや時間的経過からみて物部の伴造・伴部の集団は畿内各地から山田寺へ召集動員されていた可能性が高く、彼らは將軍の命を受けて山田大臣の従者や主だった伴党14人をその場で斬刑に処し、それ以外は捕縛して厳重な監視下に置き、その後囚人らを各地の獄舎へ連行・分置したと推測できる。だが、上の記事で注目されるのが物部二田造塩である。謀反事件の急報を得た伴造の塩も配下の二田物部らを率い山田寺へ出動していたが、將軍の指名により山田大臣への惨酷な処刑を命じられた。だが、それよりも問題なのは二田造塩・二田物部らの居地・拠点がどこにあったのかである。

Ⅳ 宇治と木幡の物部氏

『先代旧事本紀』天孫本紀には物部大連尾輿の子女の系譜をまとめて記した文章があり、その部分を系図の形に変えて揭示すると下のようになる。



この系図からは重要な情報を引き出すことができる。それは物部本宗家の族長である尾輿の男子4人の名にそれぞれ付された地名である。

- ・物部〔大市〕御狩連——大和国城上郡大市郷<祭官>
- ・物部〔弓削〕守屋連——河内国若江郡弓削郷<凡河内管区>
- ・物部〔今木〕金弓連——山城国宇治郡宇治郷<山城管区>
- ・物部〔石上〕贇古連——大和国山辺郡石上郷<大和管区>

〔 〕内の地名はそれぞれの人物が居館を構えた拠点を表すであろう。周知のように警察・検察・裁判所などの公共的強制機関は古来独立の管区を有し、管区内で発生した種々の犯罪事案に対処してきた。「警獄の官」であった物部氏も畿内三管区を管掌する統括官をそれぞれの国に配置し、凡河内は河内・摂津・和泉三国の意味で、管轄領域が広大であることと、大連の職位を継承させることとの関係で有能な二男の守屋が抜擢されたい。長子の御狩についてはその居館が大和の三輪山西北麓の大市郷にあり、「祭官」への奉仕がその主な職務活動であったため、警獄の統括官とは区別しておく必要がある。

子息らが就任した統括官(祭官を含めて)を束ねたのが父親で族長の物部大連尾輿であった。大連は天皇の側近に侍する最高執政官であり、6世紀には大伴大連と物部大連、それに蘇我大臣が任命される慣例で、それぞれが国政を分掌し、物部大連は主に警察・行刑・祭祀の分野を担当したのである。大連尾輿の居館は最高執政官の職位から推測して大和の宮都付近と推測することができ、書紀にみえる「阿都家」(用明紀)がそれであるとみられる。「阿都(アト)」という地名は河内にもあり、八尾市亀井町に鎮座する跡部神社や阿斗桑市・跡部郷などの存在により、「阿都家」は河内だとする見方がこれまで通説とされてきたが、大連の居館・拠点は、大和・河内の双方に所在し、「阿都家」は「物部の大宅(オホヤケ)」として大和城上郡の阿都(桜井市慈恩寺・外山)に、「渋谷家」が大連家の本貫たる河内の渋谷郡にあったと考えられる。

このうち本論で問題になるのは三男の金弓が名乗る今木であるが、『新撰姓氏録』山城国神別条には神饒速日命の後裔を称する今木連と、神魂命の後裔を主張する今木連があり、前者は明らかに物部系であり、後者は時代の変遷による意図的な祖変を想定できるが、天平20(748)年8月、山背国宇治郡加美郷堤田村の家地売券に郡判を加えた無位の主帳今木連安万呂がいるので、物部今木連は大化以前の物部氏全盛期には宇治郡に本拠・居館を置く有勢氏族だったと推測できる。

また、宇治郡に古くから蟠踞していた在地氏族には宇治連(宿禰)・宇治部連・宇治山守連らがあり、なかでも宇治連(宿禰)は賀美・大国・小栗・山科各郷に広く居住し、郡領氏族としての実力を有した集団であるが、物部本宗分家勢力の宇治地域への入部の動きに即応して擬制同族化し、物部の警察・刑獄に関わる職務活動に協力・参与したことが推定される。ところで、地名の「今木」に関しては『万葉集』巻9—1795に次のような歌がある。

宇治若郎子の宮所の歌

妹らがり 今木の嶺に 茂り立つ 嬌松の木は 古人見けむ

宇治若郎子の宮所が歌題になっており、また今木の嶺は宇治橋の東方に聳える朝日山（仏徳山・図Ⅰ右下端）を比定するのが『山城志』以来の通説であるから、物部今木連の拠点は宇治の渡の付近であったとみることができる。宇治の架橋は『宇治橋断碑』によって大化2（646）年とされ、壬申の乱の頃には「菟道守橋者」が存在したので、橋が架けられていなかった大化以前には宇治・久世の渡河点付近がひと・モノの流通や交通・治安活動の要地となっていたことが明らかで、一方において宇治の北に当たる木幡「道衢」とその市が刑獄の拠点としての機能を有する場であったと推測されるのである。

そこで「山科郷古図」（図Ⅰ・Ⅱ）に再び目を向けてみると、六地藏の北辺で石田郷に属する「布豆田里」（六条十里）・「布豆田西里」（七条十里）が並列しているのが確認され（『平安遺文』第6巻2922号・山城国勧修寺領田畠検注帳案）、布豆田（フツタ）とは前節で問題にした物部二田造塩の氏名の二田（フツタ）と関係する地名とみなすことができるのではなかろうか。

『先代旧事本紀』天神本紀には、饒速日命の降臨に随従したと語られた「五部造為伴領」した二田造、その配下の「天物部等二十五部人」の一員と目される二田物部の記述がみえ、大化5年の山田大臣謀反事件に姿を現した物部二田造塩の本拠とその職務の場が、木幡「道衢」と市に隣接する地域にあったことが推測され、付近には獄舎が設置されていた蓋然性があり、物部今木連と物部二田造に象徴される山城管区の警獄の官は宇治・木幡の地に政治的拠点を配し、山代管区全域の犯罪事案や治安・行刑に関わる諸活動を展開していたと考えられるのである。5世紀末から6世紀初頭頃王権に直属する物部の集団が当地にも配され組織化されたことは、物部氏による山代全域の監視・治安体制が整備され、それはまたワニ氏や宇治氏などの在地勢力に対する王権の抑圧牽制策の一環でもあったとみることができるであろう。

おわりに

学生時代に研究を進めた「衢・市」論のなかで、『古事記』応神段の説話に登場する木幡「道衢」のことがずっと念頭から離れることがなく、いつかは何らかの形で宇治・木幡の古代地域史に取り組んでみたいと考えていた。最近になり宇治橋の架橋をめぐる問題について講演を求められ、当地を数回散策し構想を煮詰めていく機会にも恵まれた。またこのところ物部氏の研究に着手してきた関係からも、当地域の歴史について何らかの発言を可能とする環境が整ったと判断したので、ここに小論をまとめてみた次第である。

本論でも重視して取り上げたように、「山科郷古図」の存在がなければこのような形で論議を展開することはできなかった。本図には中世史のみならず古代史にも関わる情報が豊富に記載されていることがわかり、山科盆地にも視界を拡張し宇治郡全域にわたる歴史の検討が不可欠で

あると思われ、今後これらの課題をさらに追究していきたいと考えている。

参考文献

- (1) 『宇治市史1 古代の歴史と景観』(宇治市役所、1973年)。
- (2) 岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」(『日本古代政治史研究』塙書房、1966年)。加藤謙吉『ワニ氏の研究』(雄山閣、2014年)。
- (3) 前田晴人『物部氏の伝承と史実』(同成社、2017年)。同「古代の市と物部氏」(『史聚』70号、2017年)。同「物部氏関係伝承の再検討」(『纏向学研究』5号、2017年)。
- (4) 日本古典文学大系『古事記・祝詞』(岩波書店、1958年)。
- (5) 日本古典文学大系『日本書紀』上・下(岩波書店、1965・1967年)。
- (6) 古代の「家・宅(ヤケ・ヤカ)」の概念については吉田孝「イへとヤケ」(『律令国家と古代の社会』岩波書店、1983年)を参照。
- (7) 日本古典文学大系『風土記』(岩波書店、1958年)。
- (8) 岸俊男・加藤謙吉前掲註2論文。
- (9) 前田晴人『日本古代の道と衢』(吉川弘文館、1996年)。
- (10) 『日本書紀』武烈即位前紀。
- (11) 1 古代の文獻には「道衢」以外にも巷・街・術・岐・陌・衢路・街衢・街巷・巷陌などの字が用いられた。古代社会におけるチマタの機能・意味などについては前田前掲註9著書を参照。
- (12) 寺嶋雅子「『山城国山科郷古図』の成立と伝来」(『中央史学』3号、1980年)。
- (13) 『大日本史料』第二編之七(東京大学史料編纂所、1942年)所載の付図より引用した。
- (14) 平良泰久他『日本の古代遺跡27・京都1』(保育社、1986年)。
- (15) 『日本書紀』継体元年3月条。『古事記』継体段には「阿倍之波延比売」と記すが、これはワニ系氏族の和安部臣の先祖であると考定されており(加藤謙吉前掲註2論著)、妥当な説である。
- (16) 『日本歴史地名大系26京都府の地名』(平凡社、1981年)。
- (17) 日本古典文学大系『万葉集』三(岩波書店、1960年)巻11—2425。当歌は山科方面から木幡・宇治に向う途上の歌と考えられる。
- (18) 『平安遺文』金石文編(東京堂出版、1965年)京都府木幡寺鐘銘。『御堂関白記』寛弘2年10月19日条参照。
- (19) 谷徹也「伏見城は「木幡山」にあったのか」(『日本歴史』847、2018年)。
- (20) 『山州名跡志』(雄山閣、1976年)第一巻・紀伊郡大善寺地藏堂の項(303頁)を参照。
- (21) 黒田日出男『姿としぐさの中世史』(平凡社、1986年)。
- (22) 網野善彦『無縁・公界・楽』(平凡社、1997年)。黒田日出男『境界の中世・象徴の中世』(東京大学出版会、1986年)。
- (23) 宮川麻紀「古代の「店」と都城」(『日本歴史』850、2019年)。
- (24) 日本古典文学大系『日本霊異記』(岩波書店、1967年)上巻第三十五話に、難波の市の樹上に篋(竹製の四角い籠)が置いてあり、持主が中身を明かさないので、市人の評議により開かせてみると持主は急いで逃走したという話が載せられている。盗品が市に持ち込まれていた事例である。
- (25) 加藤謙吉前掲註2論著。
- (26) 岸俊男前掲註2論文で始めて学問的な形で指摘され、加藤謙吉前掲註2論著がより詳細で批判的な検討結果をまとめている。
- (27) 詳しくは前田晴人前掲註3の諸論考で述べている。
- (28) 餌香(恵我)市は大和川・石川合流点付近にあり、竜田道・東高野街道・大津道・渋河路が交差した要衝で、橘の樹が衢のシンボルツリーとなっていたらしい。
- (29) 鎌田純一『先代旧事本紀の研究校本の部』(吉川弘文館、1960年)。
- (30) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』本文篇(吉川弘文館、1962年)。
- (31) 『大日本古文書』三(東京大学出版会、1982年)112～3頁。本家地の地主は宇治宿祢大国、郡判に署名したのは大領外正七位下宇治宿祢君足・少領外従八位下宇治宿祢都恵・主帳无位今木連安万呂である。奈良時代には在地豪族の宇治宿祢の一族が勢力を拡大しつつあったことが看取される。因みに宇治(菟道)連は天武13(684)年12月宿祢賜姓に預かっている。
- (32) 前掲註16書参照。
- (33) 狩谷掖斎著『古京遺文』(勉誠社、1968年)8～9頁。
- (34) 『日本書紀』天武元年5月条。